

特集 小児整形外科—新たな治療法の導入—

introduction

1971年、『L'Orthopédie』を出版したNicolas Andryは整形外科の創始者といわれています。“L'Orthopédie”とはギリシア語の曲がったものをまっすぐにするという“ortho”という言葉と、小児を意味する“pédie”という言葉の造語であり、小児の変形を矯正することからきています。本来のorthopedicsは小児の治療から命名されていたのですが、外科技術の発展、外傷の重症化、少子高齢化に伴い、orthopedic surgeryは小児疾患から成人、高齢者へと対象の重心が変化してきました。さらに、先天性股関節脱臼は小児科が行う乳児健診により一般の整形外科で診療する機会がほとんどなくなり、先天性内反足、筋性斜頸は生下時早期に診断されるため、産科から直接小児専門病院に紹介されることが多くなっています。このような状況で、一般の整形外科の先生方が小児疾患を診療する機会が減っていると思われます。しかし、疾患の頻度が減少しているわけではありません。

2016年より、学校における運動器検診が改訂され、側弯症やその他の運動器疾患のチェックがより詳細になってきました。側弯症は種々の治療法の開発により早期からの手術療法が可能になり、成長に伴う変形に対応できるようになってきました。先天性内反足の対する考え方も大きな変化が起こり、従来と異なる治療体系がほぼ固まりつつあります。先天性股関節脱臼は、成人で行われていた股関節鏡の小児への導入や小児適応した固定材料の使用により治療法も改良が加えられてきています。くる病や骨系統疾患などの長管骨変形に対し、従来のステープル法ではない新しく簡便な成長を抑制する方法も開発され、治療に使用されています。脳性麻痺の分野ではボツリヌス毒素による痙縮に対する治療が実践されるようになり、保存療法として歩行や上肢運動の改善に寄与するようになってきています。悪性骨腫瘍も系統的全身化学療法を中心とした集学的治療体系が構築され、成績が飛躍的に向上しています。陳旧性モンテジア骨折に対し、コンピュータを利用して前腕変形の矯正を行うことにより治療を行う方法や、先天性下腿偽関節症に対し、脛骨と腓骨を一塊として骨癒合を行う方法なども確立されてきています。創外固定器の進歩や能動義手の発達により、さらなる先天異常を有する小児のADLが改善されてきています。

成長してゆく小児期に最善の治療を行い、成長後に障害を残さず生活ができるようにすることを目指す治療法を本号では紹介いたします。

福岡市立こども病院整形・脊椎外科

高村和幸